

三 郷 町

～ SDGs 未来都市としてスマートシティの実現を目指す ～

奈良県北西部に位置する三郷町は、スマートシティの実現に向けた先進的な取り組みを進めており、デジタル技術の活用や SDGs 推進、脱炭素といった分野においては、県内自治体の中でも先駆的な存在となっています。

また、日本遺産「龍田古道・亀の瀬」や Jリーグチーム「奈良クラブ」の拠点といった地域資源を新たな魅力として打ち出しており、今後は交流人口のさらなる増加が期待されます。

I 概要

1. 地理と歴史

三郷町は県北西部に位置する人口 23,219 人（県内 39 市町村中 17 位）、世帯数 9,494 世帯（同 17 位）、面積 8.79km²（同 33 位）と非常にコンパクトな町である（総務省「国勢調査 人口等基本集計」（2020 年））。町の北西部は信貴山・高安山などの山並みを背に東南東の方向に約 8 度の傾斜をなす。特に近鉄生駒線信貴山下駅から信貴山に向かって延びる坂は急勾配で、1983 年まではケーブルカーが走っていた。

明治期に立野、勢野、南畑の 3 村が三郷村となり、1966 年の町制施行で三郷町となった。河川や山稜が行政区域となっており、西は生駒山脈の山嶺を境に大阪府八尾市・柏原市に、南は大和川を経て王寺町に隣接している。

1976 年に城山台の開発が始まり、1980 年には JR 大和路線三郷駅が開業したことで、奈良市内と大阪市内に鉄道でのアクセスが確保できたことから、大阪府のベッドタウンとして宅地開発が進んだ。その一方で、金剛生駒紀泉国定公園

三郷町の位置図



に指定される信貴山と一級河川大和川に囲まれた豊かな自然が残っており、良好な住環境を有している。

2. 産業・人口構造

従業地による就業者人口（15 歳以上）の産業別割合を見ると、第 1 次産業が 0.8%、第 2 次産業が 22.6%、第 3 次産業が 76.6%となっており、奈良県全体（順に 2.4%、22.1%、75.5%）とほぼ同じ状況となっている（総務省「国勢調査 従業地・通学地による人口・就業状態等集計」（2020 年））。

民営事業所数は 448 か所（県内 20 位）で従業者数は 4,211 人（同 19 位）。全産業に占める医療、福祉の割合が事業所数で 16.3%、従業員数で 51.7%と最も高く、病院、介護事業所の充実したまちと言える（総務省・経済産業省「経済センサス活動調査 速報集計」（2021 年））。

人口は、奈良県内の他市町村と同様、少子化と高齢化に伴う自然減により減少局面に入っている（地域経済分析システム（RESAS）：総務省「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数調査」再編加工）。

II スマートシティ SANGO の実現に向けた取り組み

2010 年に三郷町長に就任し、2022 年から 4 期目となる森 宏範町長は、民間企業勤務で培った交渉力とフットワークを活かし、DX や SDGs など次世代の技術・考え方を核とした新たなまちづくりの構想を次々と実現させている。

1. SDGs 未来都市

三郷町は 2019 年、持続可能なまちづくりのモ

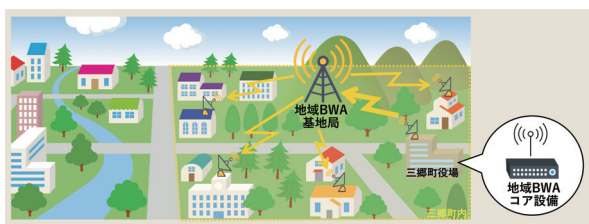
デルとなる先進事例として国が普及展開を目指す「SDGs 未来都市」に選定された。同町においてSDGs 未来都市計画は、まちづくり総合戦略やスマートシティ構想などの個別計画の上位計画として持続可能なまちづくりを目指す礎となっている。

坂が多く、大和川による水害に苦しめられてきたまちの歴史があることから、防災・減災、高齢化対策を中心としたQOL（生活の質）の向上、またベッドタウンとして発展してきた経緯から雇用の創出が課題であり、これらをSDGsの関連するゴールと定める。そしてこれらの課題解決に向けて「世界に誇る!! 人にもまちにもレジリエンスなスマートシティ SANGOの実現」を掲げ、ICT技術を駆使したまちづくりに取り組んでいる。

2. 地域 BWA による町内ネットワークの構築

「地域 BWA (Broadband Wireless Access)」とは、地域の公共の福祉に寄与することを目的に市町村単位で地域事業者が提供する無線システムのことを言う。同町では全域に地域 BWA のネットワークが構築され、健康・福祉、産業・雇用、防災・防犯、学習・教育等様々な分野でデータを利活用している。

【地域 BWA のイメージ】



●地域 BWA の特徴

地域内独自ネットワークであり、他地域の災害等による通信障害を受けない。また、閉域網として活用でき、外部からの攻撃を受けない。

●三郷町での取り組み

民設民営により町内 6 か所に基地局を設置し全域を網羅。2021 年 11 月より運用開始。

●三郷町での活用事例

防災システム、ビーコンによる見守り、空き家・道路損傷状況データ、ヘルスケア

3. 脱炭素先行地域

三郷町は、温室効果ガス排出を実質ゼロにする

カーボンニュートラル実現を目指し国が選定する「脱炭素先行地域」に県内自治体で初めて選定された。町内の 3 つのエリアで地域課題の解決と脱炭素化の効果が相乗的となる取組みを行っていく。

そのエリアのひとつである「FSS 35 キャンパス^{さんこう}」は 2022 年の移転に伴い三郷町に譲渡された奈良学園大学三郷キャンパスの跡地で、町の事業としてサテライトオフィス、スポーツパークの設置、民間ではデイサービスや専門学校、日本語学校などとしての利用が予定されている。ここでは太陽光発電による電力供給や経済活動の活発化による雇用・賑わいの創出といった取組みを通じ、災害の多さや働く場所の不足、地域の衰退といった地域課題の解決を目指していく。

【奈良学園大学三郷キャンパス跡地利活用計画】



FSS35 スポーツパーク

- ・スケボー・BMXパーク
- ・テニスコート 2面
- ・バスケットコート 1面

サテライトオフィス

健康交流ゾーン (1号館、2号館、3号館及びテニスコート等)

健康増進を図る事業を通して高齢者や障がい者の居場所づくりや、健康相談の実施等、施設利用者及び住民の健康・交流に資するゾーン

教育研究ゾーン (5号館、6号館、7号館)

乳幼児から成人までを対象とする教育とそれに伴う研究を行うゾーン（施設利用者や地域住民の交流につながる提案も可能とする）

産業振興ゾーン (10号館)

産業の振興として、サテライトオフィスを整備し、町内の雇用や起業の推進を図るゾーン

4. デジタル技術を活用した見守り

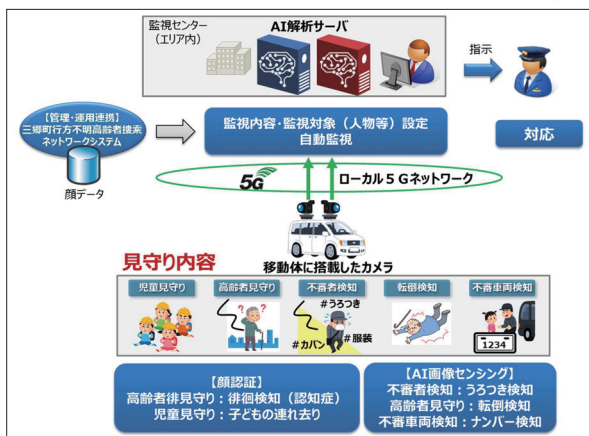
三郷町では、デジタル化・DXにより社会問題を解決していくための取り組みを進めており、次世代技術の実証実験にも積極的である。

総務省に採択された「スマートシティにおける移動体搭載カメラ・AI画像認識による見守りの高度化」実証事業企画では、自動運転車両に搭載した移動防犯カメラを活用した顔認証による子ども、高齢者等の見守りシステムの実証実験を行った。

子どもの見守りについては、町内に設置しているカメラの映像を役場で集中監視する仕組みがすでにあるが、それに加えて子どもの行動をセンサーで把握し、保護者に通知する仕組みも新たに導入する。人口減少により人手による見守りが限界を迎える中、デジタル技術を活用した見守りを一足早く実現している。

なお、これらの施策には相応の費用も掛かるが、「子どもたちの安全確保は何よりも大切なものである」との考えのもと優先的に取り組まれている。

【総務省「令和3年度 課題解決型ローカル 5G 等の実現に向けた開発実証」採択事業】



Ⅲ 地域資源を活かしたまちづくり

1. 日本遺産「龍田古道・亀の瀬」

2025 年の大阪・関西万博は奈良県内の観光地にとってもチャンスとなる。三郷町はもともと住宅地としてのイメージが強く、観光地としての知名度は低かった。そのような中、同町から大阪府柏原市にまたがる「龍田古道・亀の瀬」が 2020

年に日本遺産に認定され、観光地としての魅力も高まっている。

龍田古道は古くから大和と河内を結ぶ官道で、奈良と大阪をつなぐ交通の要衝としての三郷町を象徴する文化資源である。そのルートのひとつにある「亀の瀬」は奈良盆地の水が集中する溪谷地帯で、近代以降も地すべりが発生する難所である。これは日本人の自然との関わり・共生を示しており、現在の壮観な景観はその歴史の積み重ねとも言える。インフラ施設を観光するインフラツーリズムが注目されるが、「地すべり」をテーマとするものは全国的にも珍しく、観光資源としてのポテンシャルは高い。

また、三郷町では日本遺産への観光や大和川でのカヌーなどのアドベンチャーツーリズムの拠点としての「川の駅」の整備、三郷駅前親水公園（水と親しめるように作られた公園）の整備、治水を目的とした大和川川底の土砂の除去など、観光振興や地域活性化につながる様々な施策が計画されている。これらは「三郷町かわまちづくり計画」として国土交通省の支援制度に採択されており、これらの実現を通じて観光地としての魅力が高まることにより、交流人口の増加が期待される。



(左上から時計回りに) 龍田古道、亀の瀬構成文化財「旧大阪鉄道亀の瀬隧道」、川の駅 (イメージ)

2. J3 奈良クラブの拠点

2022 年 11 月、奈良クラブの J3 昇格が確定し、奈良県初の J リーグチームが誕生した。同クラブは三郷町内にある奈良学園大学信貴山グラウンドを同大学の移転に伴い購入しており、2023 年 1 月には人工芝 2 面のサッカー場にクラブハウスを

併設した練習拠点「ナラディーア」が完成した。

奈良クラブは地域密着の方針を掲げており、三郷町とも連携協定を締結している。町内にプロスポーツの拠点が整備されることで、地域活性化や子供たちの心身の育成などの効果が期待されていたが、今回の昇格によりそのチャンスはより高まったと言える。



奈良クラブの練習拠点「ナラディーア」グラウンド（左）と併設するクラブハウス（右）

Ⅳ 誰一人取り残さないレジリエンスなまち

1. インクルーシブシティさんごう

「インクルーシブ（inclusive）」とは障がいの有無や国籍、年齢、性別などに関係なく、違いを認め合い、その違いを特別扱いせず共生していくことを言う。例えば障がいのある子でも遊べるような形状となっている遊具はインクルーシブ遊具と呼ばれる。三郷町では令和5年度から「インクルーシブ予算」を創設し、インクルーシブ社会の実現への取組みを推進している。前述のインクルーシブ遊具の整備、障がい者雇用の推進、多言語翻訳システムの導入、デジタルデバインド（デジタル技術活用ができる人とできない人との差）の解消などを目的とする事業が、早速実施されていくこととなる。

2. 防災拠点の充実

三郷町は、役場をはじめ公共施設の多くが大和川沿いにあるため、高台にある学校給食センターを非常時における行政拠点として整備している。

森町長は、東日本大震災の約半年後に宮城県気仙沼市を視察した経験から「水と食料の確保」と「停電対策」の重要性を認識し、同センターの防災機能を強化、耐震性貯水槽（60m³）では想定避難者が3日間必要とする水を確保している。また

耐震性の高いガスコージェネレーションを設置しており、停電時にも電力を確保できる体制を構築している。



学校給食センター

耐震性貯水槽

森町長は、「『デジタル化の推進で効率化できた時間を住民サービスの向上に使おう』という声から職員から上がってくる」と頼もしそうに語る。三郷町で先進的な施策が次々に進められているのは町長の手腕も大きい、それを支える職員の資質も確実に向上しているようだ。

森町長が特に期待を込めて語ったのが若手職員のやる気と発想力。若手職員のグループが気兼ねなく施策を企画立案できるよう、町長にアイデアを直接提案できるよう体制化したところ、秀逸な企画が複数あがってきたとのこと。森町長は「SDGs推進は町にとって最も重要なテーマの一つであるが、行政組織としてのこれまでの決裁手順では若手職員の発想が埋もれてしまい、新たな展開は生まれにくかった。そのような中、若手職員に活躍の機会を与えたことで、新たな事業が生まれるきっかけになっている」と目を細める。宅配事業者の業務負担が問題となる中、三郷町が町内在住の希望者に宅配バッグを無料配布した事業などは、これらの発想から生まれた新たな取り組みである。

部課の垣根を越えた若手グループの発想は、SDGs 未来都市としての三郷町を更に進化させ、新たなフェーズへと導く原動力となっていくだろう。

（秋山利隆、佐々木東吾）